

わが祖先の

團碁伝授物語

片山カ

Tsutomu Katayama



# わが先祖の囲碁伝授物語

片山 力

## わが先祖の囲碁伝授物語 目次

はじめに	3
1.片山家初代記：片山伊賀守行重（家督：1548-1587；39年）	
1.1 京都寂光寺の訪問	5
1.2 碁賛一師匠と片山伊賀守行重との初の情報交換	6
1.3 片山伊賀守行重の出自報告	7
1.4 寂光寺訪問の目的	11
1.5 片山家の神職に転進	14
1.6 碁賛一師匠による囲碁情報伝授	16
1.7 一代毎の情報交換方式の設定	21
1.8 囲碁指南	23
2.片山家第2代記：神祇大輔家敏（家督継承：1587-1617；30年）	
2.1 片山2代家敏の時代の主要史実と概況	24
2.2 片山2代家敏による美作地方の情報提供	26
2.3 碁賛二師匠による囲碁情報伝授と囲碁指南	31
3.片山家第3代記：神祇大輔齊家（家督継承：1617-1648；31年）	34
4.片山家第4代記：神祇大輔有家（家督継承：1648-1666；18年）	41
5.片山家第5代記：神祇大輔家文（家督継承：1666-1692；26年）	45
6.片山家第6代記：神祇大輔家正（家督継承：1692-1713；21年）	50
7.片山家第7代記：伊賀守家繁（家督継承：1713-1748；35年）	57
8.片山家第8代記：薩摩守家政（家督継承：1748-1765；17年）	66
9.片山家9代記：薩摩守家永（家督継承：1765-1788；23年）	71
10.片山家10代、11代、12代記（家督継承：1788-1808；20年）	77
片山家第10代：伊賀守家重（家督継承：1788-1799；11年）	
片山家第11代：摂津守舎止（家督継承：1799-1803；4年）	
片山家第12代：淡路頭舎昌（家督継承：1803-1808；5年）	

11.片山家第 13 代記：淡路祐舎房（家督継承：1808-1843；35 年）	81
12.片山家第 14 代記：和泉守旭(舎直)（家督継承：1843-1870；27 年）	87
13.片山家第 15 代記：三河守薫(舎久)（家督継承：1870-1905；35 年）	94
14.片山家第 16 代記：片山多猛（家督継承：1905-1923；18 年）	101
15.片山家第 17 代記：片山美芳（家督継承：1923-1988；65 年）	111
16.片山家第 18 代記：片山明（家督継承：1988-2002；14 年）	123
補記 美作領民の江戸時代の抵抗史	138
1.織豊時代と社会の変化	138
2.美作における幕藩体制による領民支配体制の確立	139
3.身分固定制の制定後の農村実態	141
4.美作地区の領民の反抗事例と考察	145
5.美作地区領民反抗の背景	164
6. 百姓一揆の闘争形態とその推移	170
追記 人間支配の天才、家康の影響力の考察	180
後記 片山真知子刀自命の物語批判	188
おわりに	191
参考文献	197
付属資料	203

## はじめに

私がこのような陰気な面白くもない書き物を作る気持になった理由は 3 つ程ある。最初のきっかけは昨年の夏、甥の勝木君から父(私の兄)の十年祭の出席可否のはがきを受けたときである。そのとき、兄の死の 5 年程前に続けて鬼籍に入った私の両親の霊祭を一緒にするので、両親の生年月日を教えてくれとのメールが入った。

そこで、はたと困った。私は両親の生年月日までは辛うじて覚えているが、改めて問われると正確な日までは自信がない。親不孝といわれても仕方が無いが、高校卒業以来親元を離れ家族との交流は疎遠になり、親の誕生祝などしたことがなかったし、自分の戸籍謄本は度々取ったが、最近の謄本には親の生年月日は記載されていない。暫く考えていた所、兄が生前、数代前の我が家の家系と親戚関係図を作っていて、私がそれを手書きしたメモがあることを思い出し、それを探しだし真偽の程は確かではないが、それを送った。

考えてみると、私の家系は古いことは両親がよく言っていたが、私は国民学校 3 年生のとき、今までの教えられてきた古い話は間違いであると、教科書に墨を塗ったことを思い出し、これまでの価値観が変わり家系が古いことなど何の自慢にならないどころか価値が認められなかった。

しかし、この年齢になって、自分の両親の生年月日を知らないのは非常識である、ならばもっと昔の先祖のことも知っておくべきではないかと思うようになった。私の生まれ育った片山家は岡山県東部の片田舎にあり 18 代となる兄の代が最後で、その子孫たちはすべてこの土地を離れ、現在では元片山家の本籍地は他人のものとなっており、本籍地に形跡を残しているのは僅かに粗末な墓のみである。それを整理しておくことは先祖への責務ではないかと思うようになったことである。

第 2 の理由は、私は所謂碁キチで囲碁が唯一の趣味であるが、近代囲碁が始まった本因坊家と自分の家系を眺めてみると本因坊家は私の先祖とほぼ同時代であることから、先祖ももしかして碁の好きな人も居たのではないかと思うようになった。また囲碁の歴史を調べてみると江戸時代にえらく強い棋士が居て技術レベルが高いことに驚いた。私の先祖と碁との関連について考えているうちに、先祖が本因坊家に碁の指南を受ける構想が浮んだ。ところで、私はかつて会社で同僚に、囲碁の本を書く、と気楽な気持で不用意な発言をしたことがある。同僚も、囲碁の本は書けたか、と冷やかしの年賀状を貰うこともあった。このようなことから先祖と囲碁との関連を想定して、囲碁の歴史を勉強してみたいと思い立った。

最後の第 3 の理由は、ボケ防止である。仕事を辞めて何となく刺激のない生活で毎日インターネット囲碁をやっていたが、毎日が単調な生活でこのままでは本当に認知症になる不安を覚えた。そして、先祖の生きた所、即ち私が生まれ育った所は、江戸時代には当初は津山森藩の南の端っこに属していたが、その後津山森藩には複雑な事情が発生し、切り離されて天領になったりした。遠い昔の話と思っていたが、津山市史やわが町の町史を読んでみると何となく現実感が沸き興味をもった。

それらの地方史を読んでいるうちに、私の地方の住民、特に農民が津山藩森家、森家改易後を引継いだ津山藩松平家の圧政により、貢租が達成できず、絶人という生活破綻者が多く生まれ飢餓により苦しみ死亡していった状況を知ることになった。

私はこのような状況は冷害の多い東北地方や富士山と浅間山の噴火のあった関東地方の話と思っていたが、私の地方の祖先が他の地方と同様に、あるいはそれ以上の7公3民(実質7.5公2.5民)という高租税に定常的に苦しんだことに驚いた。このような史実と遊びの話の囲碁の歴史とどのように結びつけられるのか分らなかった。

事実、囲碁の話よりもわが地方の住民史を勉強し纏める方が重要であるようにも思えた。しかし、それでは本来の先祖が囲碁を習うという設定と離れるので、わが先祖が本因坊家の師匠に不満をぶつけるという対談方式で二つのテーマを組合せることにした。わが先祖が生きた時代を一区切りとして、これらを適当に並べてみたものである。

話題が囲碁史と地方史という関係のないテーマのために、古い文献を東京の古文書店から購入したり、国会図書館で探し、読むことから始めたため、面倒で手間のかかる1年間の仕事であった。話題は極力史実の文献を引用したため、冗長な内容となり、面白くもない書き物となったが、私自身としてはかなり勉強になり、ボケ防止という3番目の目的はかなり達成できたものと自負している。



写真1 片山家歴代の霊標

祖父多猛が書残した片山家先祖名の書付を、父美芳が片山家墓地に残した霊標

右の写真は初代伊賀守行重から10代家重までの諡号と没年が記載されている。

中央の写真は、霊標の裏面で11代舎止から16代多猛までの諡号と没年(多猛の没年は美芳が記入)と、明治25年の多猛による「多猛23歳の時の詩」が記載されている。

残念ながら、私はこの詩を文字通り漢詩のように原文読みと解釈は出来ないが、父から聞いた内容は「寛政2年に累代のお祝いをしていた時火事となった。財産を失ったことに憂いはないが、ただ祖先の記録が灰燼となったことは誠に残念である」という意味らしい。

左の写真は18代明が作ったもので、17代美芳、妻喜世子夫妻と18代明が入っている。奥に片山家の霊神があり後方の森が八幡神社である。

## わが先祖の囲碁伝授物語

### 1. 片山家初代記：片山伊賀守行重（家督：1548-1587；39年）

#### 1.1 京都寂光寺の訪問

天正15年(1587)の春、質素な身なりではあるが、風格のある初老の武士が京都東山にある法華宗系の日蓮宗の塔中である寂光寺の門の前にきて叫んだ。

「頼もう」

「何か御用でござるか」

中から寂光寺の囲碁相談役碁贅一ごきんいちの用人の碁楽楽左衛門ごらくらくざゑもんは疑い深くじろじろとその武士を眺めながら応えた。

「余は作州藤原の住人、伊賀守行重いがのかみゆきしげと申す者でござる。仔細あつて、囲碁に関する情報を得たく参上致した、しかるべく御仁にお目通り願いたい」

楽左衛門は、また例により囲碁指南の話かと思ひながら、いつものように決まり文句をぶっきらぼうに応えた。

「ただ今、お相手役の碁算一師匠は御不在である」

この年、天正15年は、秀吉が応仁の乱から始まった戦国の世を平定し関白太政大臣となり、豊臣姓を賜り豊臣秀吉と名乗った。応仁の乱以降、約120年続いた長い大きな戦乱も大方治まり、世の中が少しずつではあるが平穏になってきていた。そのようなことから、上級武士ばかりでなく一般の地方武士や僧侶の間では囲碁を楽しむ者が出てきた。特に、時の支配者である豊臣秀吉や徳川家康も囲碁が好きで、織田信長時代から、眼をかけられていた日蓮宗の寂光寺の僧、日海上人が囲碁の師匠として彼等天下人のお相手をしていた。この頃寂光寺では、日海の弟子から一般庶民にも囲碁指南をしてもえるようになって指南を乞うものが増えてきていた。しかし、多くの者は、囲碁指南にかこつけて、仕官の依頼や天下の情報収集が主目的で、本来の囲碁に興味を持って来る者は少なく、また、暇つぶしで様子を見に来る者も多く居た。

一方、寂光寺では、日海上人は信長には日蓮宗を迫害されたが日蓮宗の再興を考えていた。庶民に日蓮宗を再興、普及させる手段の一つとして囲碁を通じて庶民に日蓮宗に親しみを持たせられるのではないかと考えたのである。

日海上人は囲碁の優れた才能に加えて政治的手腕があり、時の権力者の信長、秀吉、家康に囲碁を通じて上手く取入ることに成功していた。後に本因坊家を興し贅砂となる日海上人は囲碁の弟子を多く持っていた。その中で後に囲碁4家となる中村道碩(井上家元祖)、安井算哲(安井家1世)等の弟子は有名であるが、それとは別に一般庶民相手の囲碁相談役の僧を作っていた。

その者の名は碁贅一という。この僧の囲碁の実力は4段程度でたいしたことはないが、物腰柔らかく、人当たりが良く、人の意見もよく聞かれば、営業担当技術サービスのな役割を果たしていた。碁贅一には世話係の受付用人が一人おり、その名前を碁楽楽左衛門

といった。最近寂光寺には浪人の他に地方の有力武将、堺の商人、僧、神主等が多く尋ねてきた。この碁楽楽左衛門はあまりに多いのでそのような客人の選別をする方法を考えたのである。即ち、3種類の選別をした。

まず、第1は、「お相手役の碁賛一師匠は御不在である」と応えると、  
「左様か、それは残念である、して何時頃お帰りか」と聞くので、  
「本日は大師匠の日海上人様と打合せにつき、一刻(2時間)はかかるであろう」

と応えると特別の目的のない者は「左様か、それは残念である」といい「それがしはどこそこの住人で、こういう用件で参上した。では改めて参上する」と素性と名前、訪問目的を簡単に口上して帰る。これで大体5割方の訪問者は裁ける。しかし、中には、「それがしは遠路参った、本日は是非にお会いしたいので待たして頂きたい」といって粘る者もいる。その様子から、そのような者には楽左衛門子はひとまず部屋に入れて待たすことにする。

「然らば、部屋に案内するので暫し待たれよ」

といい部屋に案内し、影で客人の様子を見ながら品定めする。その様子を碁賛一師匠に逐一報告し、碁賛一師匠に面会するのかどうか判断してもらうのである。

碁賛一が会いたくないといえ、一刻して、  
「相談役の碁賛一師匠は、お帰りが遅いようである、本日はお引取り願えまいか」等と言って返す、この方法で約2割は帰る。

それでも、「いや、それがしは、是非ともお会いしたき義がござるので待たして頂く」といってさらに粘る者がいる、しかし、その数は訪問者の3割程度になる。このようにして、訪問者の仕分けを行うのである。

今、来たこの武士の訪問に対して、楽左衛門は例のごとく、  
「ただ今、お相手役の碁賛一師匠は御不在である」

と応えたが、伊賀守行重と名乗るこの武士は  
「余は遠路はるばる作州より参った、本日は是非にお会いしたいので待たして頂きたい」

と粘ったので、楽左衛門は仕方なく、部屋に案内し、例によって様子を見ていた。しかしその様子に驚いた。

この武士は脇差を横に置き、整然と胡坐をかいて据わり、正面に掲げている欄間の掛物を凝視した後、暫くして腕をくみ瞑目している。楽左衛門は、これは只者ではないと思い、碁賛一師匠に状況を報告した。

## 1.2 碁賛一師匠と片山伊賀守行重との初の情報交換

碁賛一師匠は、楽左衛門の話聞いていたが、「よし、それでは会おう」といって漸く、対面室に出てきた。

「やあ、長らくお待たせして申訳ない、それがしは囲碁相談役の碁賛一でござる」

と応えると、この武士は改めて

「これはかたじけない。余は、作州藤原の住人、片山伊賀守行重と申す者でござる。この度、仔細あって、囲碁の情報習得に参上した、宜しく御伝授願いたい」



と丁重に頭をさげて述べた。これに対して碁賛一師匠は大仰に、  
「近頃は、秀吉殿が囲碁をお好みのこともあり囲碁愛好者が多く、それがしも対応にやや  
繁多な状況でござる。また、囲碁は博打だとのつまらぬ風評を流す者もあるやに聞いてお  
る。それがしとしては、囲碁は推奨すべきことにつき、また多くの余得も生じることゆえ、  
囲碁指南は喜ばしく存じているが、真に学びたいと思う者だけに御意向を承ることにして  
いる。それ故そなたの御所存を伺いたい。その前に先ず、そなたの素性と動機について伺  
いたい」と問いただした。

「それは至極尤もなことでござる。それを聞いて安堵した。然らば、順を追って御説明し  
たい。少々長くなるが宜しゅうござるか」

と改まっていうので、碁賛一師匠は、このような真剣な眼付をする者は最近では数少な  
いので指南に値する男だ、と思い真面目に聞くことにした。

「結構でござる。本日は懸案の仕事も済ませた故、しかと貴殿の存念を拝聴しよう」  
と応えた。

それから伊賀守行重の話す内容は、自身の出自と家督継承方法および囲碁情報伝授目的  
の3点であったが長々とその弁明を行った。さらに自分の出自とは関係なく、横道に入り  
苦勞話や自慢話も多かったが、碁賛一師匠は最後まで付合うことになった。

### 1.3 片山伊賀守行重の出自報告

先ず、伊賀守行重は自身の出自について長い説明に入った。

「余は、秀吉殿と同年の<sup>よわい</sup>齡にして天分5年(1536)\*注)に、この美作、通称作州の久米南  
条郡藤原の地に生を受け、いま藤原の地にある丸山城の城主である。城主になるまでの経  
緯をゆるゆるとご説明いたす」\*A1)

\*注)秀吉の出生は天分6年とされているが、天分5年説があり、ここでは天分5年説を採用した。

「ほほう、ご城主でござるか。これは御無礼仕った」

「いや、城主とはいえ家臣は50名足らずの小さな地侍であり、藤原部落住民の不平・不満  
の調停や他部落からの盗人等に対抗する警護が主たる業務にして、殺傷を行うのが狙いで  
はない。家臣も近くの民百姓の次男、三男であり、争いが無いときは余の僅かな所有地の  
農耕を行い生計を立てている。もともと余は殺生を好まぬ者であるが、秀吉殿の天下平定に  
より、世も安泰になったことゆえ、息子に家督を譲り、隠居を考慮中の身である。余の今  
の仕事としては、この『由緒ある八幡神社と丸山城』を保護し、子孫に引継ぐには如何な  
る手立てが宜しいか思案しているところである。それともう一つ、余は幼き頃に囲碁を覚  
えたのでござるが、最近再び始めてみると面白く、余生の過ごし方として宜しいので子々  
孫々に伝授してやろうと考えている次第である」

この応答を聞いて、碁賛一師匠は今まで相手をしたなかで珍しく真面目で素性も浪人風  
情では無いので教え甲斐がある男だと思い、真面目に相手をする気になった。

「それは殊勝な心根でござる、それがしもそなたの如き御仁に会うのは珍しい。お説を伺  
おう」と応えると、伊賀守行重の長い口上が始まった。

「それでは先ず、藤原の地と由緒ある八幡神社と丸山城について、<sup>いにしえ</sup>古のことになるがご説

明したい」

「由緒ある八幡神社とはどういうことでござるか。それがしには、美作の地は狐狸の住む山里ぐらいの覚えしかないが」

「それは心外である。今は昔、応神天皇の御世(西暦 390 年頃)に、応神天皇の命令で弟彦王が神宮皇后に従って百済、新羅を攻めたが、そのときこの地区の屈強な男をつれて従軍し戦果をあげた。その軍功により弟彦王は当時藤原県と称していたこの丸山地区領と和氣氏の姓を賜わった。その子孫が和氣清麻呂である。この和氣清麻呂のことは御存知か」

「応神天皇といえわが国の古墳時代で真偽の程は詳らかではないようであるが、百済、新羅を攻めたことは、高句麗の国の碑にあると聞き及んでいる。また、和氣清麻呂は備前の国の人と聞いているが備前と美作の区別も無かった頃であろうから貴殿の近くの出自と理解して宜しいか」

「まあ大方そうである。余の藤原部落は美作の最南端で備前と境を接している。和氣清麻呂は、応神天皇の御世より約 400 年の後(西暦 780 年頃)に活躍し、備前と美作の統治者となった。和氣清麻呂がこの藤原の地に任じているとき、この地に八幡神社を建造し祖先を敬ったものといわれておる」\*A2)

「大昔のことを話されているがどの程度真の事かのう」

「八幡神社があることは何よりの証である。一方、丸山城は今より約 30 年前の天分年間にこの地域を治めた美作の地侍である岸本藤左衛門俊行という者が築城し治めていた。

\*A1)

和氣清麻呂より更に約 400 年ほど時代が下り、寿永 3 年(1184)に源頼朝の家臣の土肥実平が美作の守護に命ぜられるとともに、この地の地侍たちは平家追討に協力させられた。このときから美作においても武家による守護支配体制が強化された。その後、鎌倉幕府が滅亡し、足利尊氏の南北朝の動乱を経て、室町幕府の時代になるが、室町幕府の末期に足利將軍の権威が落ちて、ついに応仁元年(1467)に東軍細川勝元と西軍山名持豊(宗全)の間で我が国中を二分する大戦争が起った。これを後の世の人が『応仁の乱』と呼び、以後大戦乱の戦国の世になったことは御存知であろう」

「そのようなことは、貴殿にいわれるまでもなく京に住むそれがしは百も承知である。それよりも前口上はよいから、早く貴殿の出自について説明なされよ」

「いや、これまでの前口上がないと、余の出自が御理解してもらえないだろうから述べているのである。ところで、どこまでご説明致したかな」

「応仁の乱が始まったところである」

「ああそうであった。しかし、『応仁の乱』の時代について、余の美作地区についてももう少し詳しく説明する必要がある。余の生まれる約 200 年前からの状況から始める。

室町幕府の時代には余の美作地区はもともと南朝方の山名氏が勢力を伸ばし、貞治 4 年(1365)に山名義理が美作の守護となった。一方、美作の南に接している備前と東隣りの播磨の守護は赤松氏の赤松則祐であった。ところが山名氏と赤松氏とは対抗意識が強く、些細なことでも小競り合いがあったようだ。

応仁の乱が始まる前の美作は山名氏と赤松氏が 2 大勢力であった。この時代には、わが美作の地区はこの両氏の子孫により山名義理→赤松義則→山名教清→赤松正則と約 30 年間隔